

8. フェルナン・メンデス・ピント



モンテ・モール・オ・ヴェーリョは田舎町ですが、その中心はタネガシマ通りです。この通り名を表すプレートには、種子島がポルトガル人たちが到達した日本の島だと説明されています。

リスボンとその近郊を巡り終えて北に向うことにして、まずはリスボンの上野駅サンタ・アポローニア駅から急行列車に乗りました。コインブラのひとつ手前のアルファレロという駅に予定の時間に着きました。この駅が次の目的地であるモンテ・モール・オ・ヴェーリョにいちばん近いはずなのですが、駅前には見事に何もありません。タクシーが一台停まっていたので、目の前の食堂で運転手を探したところ、この食堂のオーナーが運転手でした。今昼食中だというので、しばらく待っていると、口を拭きふき人の良さそうな典型的なポルトガル人が出てきました。アルファレロ駅前にはタクシーが2台しかいない



ポルトガルの誇る国有鉄道のしかもリスボン・コインブラ・ポルトという三大都市を繋ぐ幹線路線のリスボンから急行で3つめの停車駅がこの静かさです。駅前のこの建物の中に「駅前食堂」があり、そのオーナーが2台しかない構内(?) タクシーの運転手ジョアキンさんでした。

そうです。その貴重な1台です。運がいいというべきか、何とも長閑というべきか、やっ
と旅の実感が湧いてうれしくなってきました。

運転手さんの名前は何とジョアキンさん。ブラジルで笑い話に登場するポルトガル人は
必ずジョアキンで、日本人はなぜかヒロシでだったことを思い出しました。

途中、日本人の是月次郎さんが経営しているキンタ・デ・サン・マテウスという農家ホ
テルに荷物をおいて、そのままモンテモール・オ・ベérioに行きます。ここはフェル
ナン・メンデス・ピントという男の出身地です。「南蛮文化発祥の都市」大分に所縁のある
ところとして、今度の調査旅行では外すことができませんでした。彼は「東洋遍歴記」を
描いた男として知られています。ただし、彼は本国では愛情の込められたものとはいえ「ほ
ら吹きピント」という、歴史家が資料とするにはふさわしくない名前と呼ばれることもあ
るようで、いささか心細いところです。しかし、とにかく彼は日本に鉄砲を伝えたポルト
ガル人の一人という事になっています。しかも、彼は1551年に大分市（当時の豊後府
内）に来ているのです。

きょうは月曜日というのに長い昼休みのせいか、町はがらんとして静かです。市役所前
の広場も、そこから四方に広がっている石畳の通りにも人影はない。そのがらんとした街
角にタネガシマ通りというプレートがあり、ポルトガル人が1543年に到達した島とい
う説明書きがありました。さらに一本裏の通りの広場から2軒目の建物にはフェルナン・
メンデス・ピント協会という看板がかかっています。残念ながらここも、昼休み中で担当
者はいません。別にピント氏の功績や事績を保存しているわけではなく、日本で言えば公
民館か文化協会といった感じの活動をしているようですが。

大航海時代のポルトガルにはピントのような冒険商人が輩出したのでしょうが、彼は一
旗揚げた後、ポルトガルに戻り結婚して「東洋遍歴記」を書いています。わたしはまだこ
の本を読んでいないが、少くもホラ話が入っていたとしても、わたしはこのピントを
好もしく思っています。何といても16世紀に大分に来ているというだけでも、何か親
戚になったような親しみを感じてうれしくなってくるじゃないですか。



モンテモール・オ・ベérioの市役所広場も、昼過ぎというのに人っ子一人いない。奥に市議会も見
えている。タネガシマ通りは市役所広場から始まっている。わたしの背中に見えている石畳の通りだが
こちらにも、人はおろか犬もネコも見なかった。どこの国も地方の事情は変わらないようだ。

ところで彼の責任かどうか分かりませんが面白い話があります。リスボンのベレンの川
岸に直径18メートルほどの石のモザイクづくりの世界地図が描かれています。そこには

ポルトガル人による日本到達の年が1541年となっているのです。その根拠となっているのがピント氏の「東洋遍歴記」で、それも種子島ではなく豊後だということです。今ではモンテモール・オ・ベリョの通りにあるように、わたしたちが歴史の教科書で習った通り1543年に種子島というのが定説でしょう。地下のピント氏自身はどう思っている事か。案外舌を出しているのかもしれませんがね。

人通りのない石畳のタネガシマ通りを歩いた後、裏山の名前の由来でもある古城に上りました。コインブラを守るための出城だそうです、それにしては規模が大きいのです。14世紀の半ば、ある秘密会議がこの城で開かれているから、それ以前に築城されたものです。やはりアラビアとかイスラムの匂いがしみ込んでいるようです。秘密会議の方はその後の悲劇の恋物語に繋がるのですが、それはコインブラについてから、改めてその舞台となった場所を訪ねて、悲劇の主人公に会ってみようと思います。



モンテモール・オ・ベリョの古城から街を見下ろすと背後になんと田んぼが広がっていました。ポルトガルでも有数の米作地帯だそうです。ただし、コメの味は見事にまずいです。ポルトガルはタコ飯を始めコメ料理も多く、米で作るお菓子さえあるというのに不思議な話ですね。